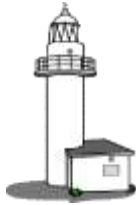




本日はよくお参り下さいました

今年も境内に七五三のお祝いの子供たちが、参詣する姿が見られる時期になりました。首にお祝いのリボンをかけてあげると、はずかしそうにニコニコする子、礼儀正しく御礼をいう子、慣れない格好に嫌がってしまう子、様々な反応が返ってきて、かわいらしいなど類がゆるみます。ご祈祷ではお参りの仕方をお教えしています。幼くても5歳、7歳となると、覚えている子も多いようで、通学時に鳥居の前で立ち止まり、手を合わせている小学生や、帰りに友達同士でお参りしてゆく子をよく見かけます。そういった姿を見かける度に心があたたまりますし、こういった子供たちが日本の将来を担ってくれるのかと思うと、とても頼もしく感じます。頼もしいと言えば、先月31日には、すみれ会のみなさんが、境内の掃除をして下さいました。すみずみまで丁寧に掃除をして下さり、とても清々しい境内になりました。すみれ会の皆さんありがとうございます。さて皆さんは11月1日、灯台記念日をご存知でしょうか？この記念日は明治元年11月1日に横須賀市の観音崎灯台の工事が始められ、翌年1月1日に灯台が点灯されたことにちなんでいます。この観音崎灯台が、なんと日本で初めての洋式灯台で、昭和24年から記念日が始められたとのことです。横須賀に日本で初めての洋式灯台があるというのは、ご存じの方も多いたと思いますが、灯台記念日というのは、なかなか覚えていない方は少ないのではと思います。ご紹介させて頂きました。今月も皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。権禰宜道子



11月

1日・15日 月次祭(つきなみさい) 皇室の弥栄と国家の発展、氏子・崇敬者並びに社会の幸福と平和を祈る。

3日 明治節(文化の日) 明治天皇の誕生日にあたる11月3日を記念する祝日。明治天皇の遺徳を仰ぎ、明治という時代を追憶する趣旨で、昭和20年に制定された。この日全国各地で祝賀行事が繰り広げられ、宮中でも祭儀と宴会が執り行われた。戦後廃止されたが、11月3日という日取りは現在も「文化の日」として引き継がれている。

7日 立冬 これから冬に入る初めの節で、この頃は陽の光もいちだんと弱く日足も目立って短くなり、冬の気配がうかがえるようになる。冬の季節風第一号が吹き始めるのもこの頃である。時雨の季節でもあり山茶花が可憐に咲き始める。

15日 七五三 三歳の男女と、五歳の男児、七歳の女児の健やかな成長を願う。

22日 小雪(しょうせつ) 寒さもまだ厳しくなく、雪まだ大ならずの意味でもある。冬の到来を目前に感じさせられる。



七五三おめでとう

23日 新嘗祭(勤労感謝の日) 天皇が新穀を神々に勧めて神をまつり、また御自らも新穀を食して、その年の収穫を感謝する儀式。伊勢の神宮の新嘗祭では勅使が遣わされ、大御饗(おおみけ・・・神、天皇が召し上がる食事)を供奉する。

天神さまの豆知識

―精神科医からみた神道―

東京の西東京市の田無(たなし)神社の、前宮司、故賀陽 濟(かやわたる)さんは、千葉大学医学部を卒業し、生前は「日本人と欧米人の心の比較研究」をライフワークとする精神科医でした。神職と精神科医両方の視点をおわせた「賀陽さんは神道には「三つのF」がある」と言いました。▼「F」は「フェイスフル(Faithful)つまり人が誠意をもって神や自然と向き合い、交流すること。これは「もてなし」の心につながります。二つ目は「フレキシブル(Flexible)つまり柔軟な「揺らぎ」の精神をもつ寛容に構えること。ただ漂うのではなく、日本人としての歴史、伝統、文化、風土に根ざすことが大事だということ。三つ目は「フレッシュ(Fresh)神道は古いようでいて常に新しい。常に新鮮さを保っているのです。これは仏教の無常観にもつながります。」▼さらに「いまの科学の三つの大きなテーマである、遺伝子の二重らせん、ゲノム論、素粒子論、宇宙論のそれぞれに神道は深く関係してきていると言えます。例えば、生命科学のゲノム論は塩基の組み合わせ(二重らせん)で成り立っていますし、遺伝子の「二重らせん」のもので、神道の生命観に似ている、という指摘もあると思います。何より、神道の原型といわれているものは、人間の「へその緒」であると私は思っています。」▼「生きとし生けるものすべてが、相補って共存共栄するという神道の精神性と、人間の生命の根源的な「かたち」。互いにいたわりあい、和合し、結び合って、ひとつになる。神道の和合の精神性とは、(まある)ころ、理想の「ミニユテーション」の形といえるでしょう。なぜなら、それは個々の魂を尊重しあい、自然のながによりどころを見出して、異文化を排することなく、多くのものから成る、一つの宇宙の中に生命の形を見るとき、この世のだからです。参考文献『神道と日本人』山村明義著 株式会社新潮社発行



お祭り歳時記

火焚祭(ふいご祭り) 十一月八日  
ひたきさい  
京都市伏見区藪ノ内 伏見稲荷大社

俗に「ふいご祭り」とも呼ばれる稲荷神社の祭り。「ふいご」とは、火力を強めるために用いる送風装置で、箱の中のピストンを動かして風を送ります。古代から金属の精錬や加工に使用されてきました。我が国では、昔から「ふいご」を用いる刀鍛冶などの間で、毎年十一月八日になると鍛冶場を清掃し、火の神に感謝する習わしがありました。火への感謝はやがてポイラーをいたわる気持ちに繋がります、ポイラーを扱う会社では今もふいご祭りが行われています。

今月の言葉

「敬して天神を祭るは人の道なり。元を尋ねて誠を行うは、天命をつくす所以なり。」  
吉川惟足「君道伝」より

神を敬いまつるのが人の道である。天の正しい道理とは人のためではない。なぜならこの世の始まりは、人が誕生するよりはるか古の天然自然の道理から始まったからだ。自然そのものである「神」をまつり敬うことは、天然の道理である。人は嘘をつけるが、自然は嘘をつかない。ゆえに人間誕生以前から存在する地球、宇宙の道理とは、嘘をつかない正直な誠の心となるのだ。人の道とは人が自然と共に生きる道、それが天から与えられた神道である。参考文献『神道のこゝろ』武光 誠監修 河出書房新社発行